



Title	掃除機と電気冷蔵庫の普及を通してみるごみと人間の関係 : 高度経済成長期に着目して
Author(s)	梅川, 由紀
Citation	年報人間科学. 2021, 42, p. 31-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈論文〉

掃除機と電気冷蔵庫の普及を通してみるごみと人間の関係
—高度経済成長期に着目して

梅川 由紀

論文要旨

本稿の目的は、高度経済成長期に掃除機と電気冷蔵庫が普及することによって、ごみと人間の関係がどのように変化したのかを明らかにすることである。婦人雑誌『主婦の友』と東京都清掃局内の新聞『清掃きよくほう』を中心に分析を行った。

分析の結果、三つの傾向を指摘した。第一に、高度経済成長期に生じた住宅構造の変化は、ほうきを用いた「掃き出す」掃除から、掃除機を用いた「吸い取る」掃除へと変化を余儀なくした。吸い取る掃除は掃除の際に空間を舞うチリやホコリの量を減少したが、その結果、人々は逆に空間を舞うチリやホコリを強く意識するようになったことを明らかにした。第二に、電気冷蔵庫の登場は食品を「冷やす」だけではなく「保管」することを可能とした。すると人々は、ついに買いすぎ・作りすぎ・しまい込み・結局だめにするという、「余剰品」を生み出す様子を明らかにした。第三に、掃除機や電気冷蔵庫が「粗大ごみ」として出されるようになると、粗大ごみの異質性が際立つようになった。ここから、粗大ごみ登場以前のごみが「燃やすことができ、埋め立てることができ、土壌化できる、小さな存在」であると理解される様子を示した。

以上の分析結果から、人々は空間を舞うチリやホコリ、余剰品、粗大ごみというごみを「発見」し、ごみ概念自体を拡大させている様子を明らかにした。

キーワード

ごみ、高度経済成長期、掃除機、電気冷蔵庫、ごみと人間の関係

1. 家電製品とごみの関係

今や、私たちの生活に家電製品はなくてはならないものである。筆者自身、先日自宅の洗濯機が壊れてしまった。仕方なく大量の洗濯物の手洗いを試みたが、汚れをきれいに落とすことができず、上手く脱水できず、そうこうするうちに全身汗だくになり、かえって洗濯物を増やすはめになった。手洗いを試みてたった数分で限界を感じるほど、家電製品は必要不可欠な存在となっている。

これまで社会科学分野では、家電製品に関して様々な方向から膨大な研究がなされてきた。例えば文化・生活史や社会史の切り口から家電製品を取り上げる研究がある。村瀬敬子(2005)の研究からは、冷蔵庫

という家電製品が人々の暮らしの風景やライフスタイルをいかに変容させてきたかを読み解くことができる。あるいはジェンダー的視点から家電製品について論じる研究がある。ルース・シュウォーツ・コーワン(1983=2010)の研究からは、家電製品の登場によって家事のあり方や女性のライフスタイルが変化し、家庭内の女性の役割や家事にかかる労力がいかに変化したのか／しなかったのかを読み解くことができる。いずれの研究においても、家電製品は人々の生活やライフスタイルに大きな変化を与える「原動力」と理解できる。

筆者はこれまで「現代日本の都市部にすむ人々にとって、家庭から排出されるごみはどのような存在であるか」というテーマに関心を持ってきた。ごみをめぐる研究において大前提となっているのは、人々の生活やライフスタイルの変化によって、ごみと人間の関係も変化してきたという点である。例えば環境社会学者の田口正己(2007)によれば、高度経済成長期に自給自足を基礎とした、ごみがあまり排出されない「農村的生活様式」が崩壊し、「大量廃棄型社会」「都市的生活様式」「使い捨てライフスタイル」が構築された。また市町村の行政計画は、人口・世帯・事業所の増大・拡大・集積を促した。こうしてごみは大量化・多様化し、現在のごみと人間の関係が構築されたことを指摘する。飯島伸子(2000)も、高度経済成長期を経てごみは大量化という量の問題と、自然環境や健康に影響を与えるという質の問題が生じ、社会的問題として取り上げられるようになったことを指摘する。

このように家電製品もごみも、人々の生活やライフスタイルと大きな関連を持つことがそれぞれの分野で論じられてきた。ところが興味深いことに、これまで家電製品とごみを結び付けて論じようとする作業は、ほとんど注目されてこなかった。そこで本稿では家電製品の中でも「掃除機」と「電気冷蔵庫」に着目し、これらの普及とごみと人間の関係について検討してみたい。この二つの家電製品を取り上げる理由は、日常生活の中でごみと人間がかかわりを持つ場面は多岐にわたるが、確実にごみが発生するのは掃除と食事の場面と考えたためである。ゆえにこれらの場面と関係の深い、掃除機と電気冷蔵庫に着目した。従って本稿の目的は、高度経済成長期(1955~1973年)に掃除機と電気冷蔵庫が普及することによって、ごみと人間の関係がどのように変化したのかを明らかにすることである。本稿では3.1、4.1で掃除機と電気冷蔵庫が普及するまでの歴史的事実や人々の生活に与えたインパクトを整理する。3.2、4.2で、掃除機と電気冷蔵庫の登場がごみと人間の関係にどのような影響を与えたのか、分析を試みる。5.1では掃除機と電気冷蔵庫が不要となりごみとなった際の歴史的事実やインパクトを整理し、5.2で分析を試みる。

2. 方法

日本において掃除機と電気冷蔵庫が一般に普及するのは高度経済成長期である。分析は当時の日常生活における人々と掃除機や電気冷蔵庫とのかかわりを捉えるため、「主婦」に注目した。加えて掃除機や電気冷蔵庫とごみの関連を捉えるため「清掃員」に着目した。そこで主な分析資料として、婦人雑誌『主婦の友』と、東京都清掃局内の新聞『清掃きよくほう』を用いた¹⁾。分析対象とする記事は、主婦の友は1950~1979年の1~12月号の誌面から「ごみ、衛生、掃除、団地・アパート」に関連する記事、計497記

事を抽出し用いた²⁾。清掃きよくほうは1968年創刊のため、1968～1979年の紙面全てを分析対象とした。このほか補助資料として東京都清掃局の『清掃局月報』、実用雑誌『暮らしの手帖』、新聞記事、新聞記事内の四コマ漫画、白書、高度経済成長期の生活に関連する体験記・回想記などの文献を用いた。分析は「ごみと人間の関係」という視点からこれらの資料を読み、記述のされ方／語られ方、繰り返し使われる用語、記事に付随したイラストや写真などに着目し、その変遷や意味を検討した。加えて資料を読み込む際には、主婦や清掃員はごみに関連するどのような風景を見ていたのか／見ていなかったのか、どのようなことを感じていたのか／感じていなかったのか、という感覚的な変化に注意して資料を検討した。なお分析においては、当時の主に都市部（東京都）に住む人々の生活を対象とした。

3. 掃除機がもたらすごみ概念の変化

3.1 「掃き出す」から「吸い取る」へ

掃除の仕方・掃除道具の歴史は、住宅構造の変化と大きな関連がある。生活史研究を行う小泉和子によれば、日本人の掃除の歴史は平安時代から始まる。当時は棒雑巾のようなものと羽箒を用いていた。棒雑巾とは、長柄の先にT字型の横木がつき、そこに50～60センチ程度の長い布を挟んだ、現代のモップのような形状の道具である。桶の水に浸して、拭き掃除に使用していたと考えられている。羽箒は鳥の羽を束ねたほうきである。ほうきの原型といわれ、床を掃くのに用いられていた。当時の掃除は、主に貴族住宅の土間・板の間を行うものであったという。貴族の住宅は寝殿造であり、壁がほとんどなく、床板を張った広間に柱が並び、屏風や簾などで必要に応じて空間を仕切る開放的な構造をしていた。従って小泉は、棒雑巾を持って走り回る掃除方法は、住宅構造に合った合理的方法であったと分析している（小泉 2011, 2016, 2018）。

室町時代～江戸時代には、武家屋敷において書院造が主流となった。すなわち、住宅には畳が敷かれ、床の間を設け、ふすま・障子を用いて空間を区切るようになった。明治時代に入ると書院造はさらに広く普及した。すると、長押や障子の棧のチリを払う必要が生じ、そのための道具としてはたきが誕生した。また畳敷きで、床の間や違い棚が存在する住宅を掃除するには、棒雑巾は扱いにくいと、手で持つて使用する雑巾が誕生した。書院造の普及とともに、人々の掃除への関心は高まり、掃除が道徳的な生活規範としての意味合いを強く持つようになった（小泉 2011, 2016, 2018）。

昭和に入り戦後高度経済成長期を迎えると、新しい住宅が登場する。その代表的な存在が団地であった。建築家・建築学者である宍道恒信によれば、伝統的な日本家屋では夏の風通しと冬の日当たりが重要視される。主な部屋を南に向けて開放し、北側の部屋まで風の通り道をつくる。そして南側の軒先を加減することで、夏の日差しを遮り冬の日差しを取り入れる工夫をしていた。家の内と外との間には縁側が存在し、畳の部屋と縁側の境には明かり障子が建て込まれ、縁側の外には雨戸が設けられる。雨戸を閉めると暗くなるので、昼間は雨戸を開けたままにして、風通しや日当たりを確保していた（宍道 2000b）。一方、団地では鉄筋コンクリート、石膏ボード、アルミサッシが用いられ、隙間のない気密性の高い構造へと変化

した。すると、隙間風の寒さからは解放される代わりに強制的な換気が必要となり、換気扇などが取り付けられるようになる。伝統的な日本家屋が「開放的な構造」であるのに対し、新建材を用いることで住宅は「閉鎖的な構造」へと変化している様子を理解できる（宍道 2000a, 2000b; 布野 2006; 独立行政法人都市再生機構技術・コスト管理室設備計画チーム 1993）。

こうした住宅構造の変化は、掃除方法にも大きな変化を与えた。開放的な構造の日本家屋の場合、掃除方法は以下の手順に要約できる。すなわち、戸を開け放ち、座布団や火鉢、机などを片付ける。次に天井や障子の高いところから順にはたきをかけ、ほうきで掃き出す。掃き出す際は奥の間から順に行い、掃き出したものは、座敷から外へ掃き出す。その後、雑巾で縁側などを拭いた（久保編 1991; 村瀬 2000; 小泉 2015）。ところが閉鎖的な構造の団地では、掃き出し口がないため、ごみを外へ掃き出すことが難しい。ごみを掃き出そうにもアルミサッシが邪魔をするであろうし、掃き出せたとしても、階下や周囲の居住者への配慮が必要となるであろう。こうして、ほうきによる「掃き出す」掃除が困難となり、掃除機によってごみを「吸い取る」掃除へと変化せざるを得なくなった（久保編 1991; 村瀬 2000）。また、「吸い取る」掃除への変更を余儀なくしたもう一つの要因として、絨毯の存在も指摘される（村瀬 2000）。住宅やライフスタイルの洋風化とともに、絨毯を用いる家庭が増えている。内閣府の消費動向調査によれば、絨毯の普及率は1967年には24.7%であるが、1977年には60.3%に達している（内閣府 2004）。ごみをからめ取ってしまう絨毯は「掃き出す」掃除を困難にし、掃除機のニーズを後押ししたと考えられる。掃除機は1931年に現在の東芝によって国産化・発売された（東芝未来科学館 2020）。広く普及するのは高度経済成長期であり、内閣府の消費動向調査によれば掃除機の普及率は1960年には7.7%、1965年には32.2%、1970年には68.3%に達している（内閣府 2004）。

このように、掃除の仕方は高度経済成長期の住宅構造の変化によって、「掃き出す」掃除から「吸い取る」掃除へと大きく変化した。掃除のスタイルの変化は、ごみと人間の関係にどのような変化を与えたのだろうか。

3.2 空間を舞うごみを「発見」する人々

「掃き出す」掃除と「吸い取る」掃除に関する記述を比べた時、最も違いが表れるのは、空間を舞うチリやホコリといった類いのごみの量である。ハタキを用い、ごみを叩き出した後掃き出す掃除を行う際は、空間に大量のチリやホコリが舞う様子を想像できる。実際に1954年の朝日新聞には以下のような記述がみられる。

……例えば現在市街地の雑踏した商店街では、戸外の軒と軒のすき間で畳をたたき、ハタキをかけ、モウモウと立ちのぼるゴミ、ホコリは、いたずらに隣り近所のと交りあい混合し合って、行き場なく、やがてまた再び各家庭に舞い込むのではないだろうか。（沼畑 1954）³⁾

この記事は春の大掃除という特別な日に関する記述であり、日常の掃除よりもやや大がかりな掃除（畳を叩くこと）を行っている。従って通常以上にチリやホコリが発生していたことは事実であろう。しかし

ながらこの記事からは、たとえ通常の掃除であっても、行き場をなくしたチリやホコリが再び家の中に舞い戻っていた様子は容易に想像できる。

一方、閉鎖的な構造の団地において「吸い取る」掃除を行えば、「掃き出す」掃除の時ほどチリやホコリが空間を舞うことはなくなると考えられる。実際に『主婦の友』の掃除に関する記事を分析すると、以下のような変化を読み取れる。それは、掃除道具一覧からハタキが消え、掃除機や油ぞうきん⁴⁾の登場と共に、記事に掲載されたイラスト・写真・服装に関する記述から「三角巾」が消失したり、三角巾などの「特別な装備を不要とする記事」が登場する変化である。はじめにハタキの消失であるが、おおむね1971年頃から掃除道具一覧から姿を消しはじめる。そして記事内のイラストや写真、服装に関する記述を見ると、例えば1960年5月号の掃除の服装に関する記述には、三角巾が具体的に明記されている（大田・田伏・伊東 1960: 284）。ところが評論家の犬養智子の掃除方法が紹介された1970年12月号では、「電気掃除機を使うようになった昨今、まして、気の向いたときのポイント掃除なら、ふだんのスタイルで十分」（犬養 1970: 150）と記され、三角巾どころか特別な装備は不要であることを主張する記事が登場する。このような変化は、掃除機や油ぞうきんの普及により「吸い取る」掃除が浸透し、空間を舞うチリやホコリが減少したためと考えられる。加えて、窓を閉めたままでも掃除が可能であることを指摘する記事（『主婦の友』1958年2月号, P.386）が登場していることも触れておきたい。窓を閉めたまま掃除を行うなど、「掃き出す」掃除では考えられない行為である。ここからも、「吸い取る」掃除の浸透とともに、空間を舞うチリやホコリの減少を理解できる。

ところが興味深いことに、こうした事実と反比例して『主婦の友』には空間を舞うチリやホコリが強く意識される記述がみられるようになる。それは掃除機が普及し始める1955～1970年頃に限った現象である。記事数自体は掃除に関する155記事のうち20記事であり決して多くはないが、この時期にのみ登場する特徴的な記述であることは注目に値する。例えば『主婦の友』には、掃除機を購入した体験者の声として以下のような意見が掲載されている。

^{けつろん}結論から言うと、この買物は失敗だったかもしれない。というのは、パンフレットやカタログの知識に頼りすぎたためで、いざ使ってみると、あやまりが数々あることがわかった。けれど、^{しゅうじんぶくろ}集塵袋にたまったホコリや砂やゴミなどを捨てる時、はたきとほうぎの掃除では絶対とれないゴミということがわかり、子供が畳の上を這^はっていても、安心して見ていられる。（酒井 1958: 220, 傍点ルビ原著）

上記の記事では、掃除機を使用することで、今まで意識化されていなかった空間を舞うチリやホコリをごみとして「発見」する人々の様子を理解できる。このようなごみの「発見」は同時に、「掃き出す」掃除を行っていた頃の自分達がいかにチリやホコリという「ごみにまみれた生活」をしていたのかを痛感させるようになる。以下の主婦の友の記事からはその様子を理解できる。

たしかに、はじめて（掃除機を）使って、集塵袋にたまったゴミの量を見ておどろいたわ。「こん

なホコリやゴミの中に、よく寝起きしていたものね」と思わずパパと顔を見合わせてしまいました。
(『主婦の友』1966年8月号, P.188, 括弧は筆者)

さらには「掃き出す」掃除に対する疑問を表出させ、同時に「吸い取る」掃除が完全な掃除であることが強調されるようになる。

いままでならば、こんなところはハタキですましたでしょう。たとえば、障子の棧、棚の上、額縁、季節のす戸など。ところでハタキというものは、考えてみると妙なものです。ホコリを落とすというよりも、ホコリを部屋じゅうにまき散らし、しばらくすると、空気中のホコリはまたもとの場所におちつくというだけ。このあたりで、古い習慣はさっぱりと縁切りにして、(掃除機のアタッチメントの一つである)丸ブラシを活用してみましょう。(『主婦の友』1965年8月号, P.149, 括弧は筆者, 傍点原著)

電気掃除器は、まだ洗濯機ほどには普及していません。しかし、たちまち埃を吸いとるのは、時間的、労力的に魅力です。心理学者の宮城音弥氏は、……『掃除時間が短縮されるというより、埃が完全に掃除できる結果、時間の短縮にもなりましょう……。』とのこと。(『主婦の友』1955年12月号, P.422, ルビ原著)

従って完全な掃除のできる掃除機を用いれば、量も「……大掃除の必要がないくらい、ほこりも出……」(伊東 1960: 289) ず、「二週間もすれば、部屋のホコリが1/3くらいに減り、簡単に要所だけですすことができます」(『主婦の友』1958年12月号, P.213, ルビ原著)と絶賛されている。

このように空間を舞うチリやホコリは、「掃き出す」掃除の際には取り除くべきごみとして人々に可視化されていなかった。ところが「吸い取る」掃除への転換により、人々は空間を舞うチリやホコリをごみとして「発見」し、徹底して排除し始める変化を読み取ることができる。

4. 冷蔵庫がもたらすごみ概念の変化

4.1 「冷やす」から「保管」へ

食品を冷やす行為は古くから行われていた。生活史を研究する村瀬敬子(2005)によれば、家政書の中で氷を使用した食品の低温貯蔵が紹介されるのは明治15年(1882年)以降であり、明治30年代(1897～1906年)から「氷冷蔵庫」(当時は「氷箱」という名称で紹介されていた)が登場した。氷冷蔵庫とは、氷によって食品を冷やす道具である。上下にドアがついており、上段に氷を入れ下段に食品を入れる二ドアタイプが主流であった。大正～昭和時代に入ると、氷冷蔵庫は百貨店や婦人雑誌の通信販売部でも販売されるようになり、まずは都市部の中流以上の家庭に普及し、その後広く普及した。氷冷蔵庫を使用

するためには毎日氷を入れる必要がある。そこで町には氷屋が氷を配達する風景があった。ところが氷はすぐに溶けてしまう。ゆえに冷蔵庫といっても、現在の電気冷蔵庫の冷却力には到底及ばない。その実力について小泉は「……もっぱら夏場に食べ物を冷やすために使われてただけで西瓜やビールなどはむしろ井戸に吊るしたり、清水に浸しておくほうが冷たくなった」（小泉 2011: 96）と述べるほどであった。従って氷冷蔵庫は、食品を「一時的に冷やすもの」として理解される。食品を保存することができないため、主婦は毎日買い物に出かける習慣があった（小泉 2011）。特に食品が腐りやすい梅雨時の食品管理は重要であり、様々な工夫を必要とした。例えば1950年代の『主婦の友』では梅雨時になると、食物は余分に作って残さないこと、食品が残った場合は、寝る前に砂糖や醤油を加えて煮直すこと（田中 1954: 435）、買い物にはビニールと塩を持参し、魚の腸を取ったその場で塩をふり、帰ってすぐに調理をすること（上田・金原・田中 1957: 182）などが記されている。このように、食品を「冷やす」ための氷冷蔵庫の時代には、毎日買い物に出かけ、調理法の工夫によって日々の食事を成立させる必要があった。

電気冷蔵庫は1930年に現在の東芝によって国産化・販売された。広く普及したのは高度経済成長期に入ってからで、電気冷蔵庫は白黒テレビ、電気洗濯機とともに三種の神器として人々の憧れの対象となった（東芝ライフスタイル株式会社 2017）。内閣府の消費動向調査によれば、電気冷蔵庫の普及率は1957年には2.8%であったが、1960年10.1%、1965年51.4%、1970年89.1%であり、1978年には99.4%まで達している（内閣府 2004）。1960年代にはコールドチェーンの整備とともに、冷凍食品などを保存できる冷凍冷蔵庫が登場する。1970年代には冷蔵庫が大型化し、1980年代にはチルド室付き冷蔵庫など、より高度なものへと変化した。このほか冷凍能力の高まりや冷凍食品や電子レンジの普及とともに、自宅で食品を冷凍保存するホーム・フリージングも行われるようになった。このように電気冷蔵庫は氷を取り替える手間がない点、低温が持続するため保存性に優れていた点が氷冷蔵庫とは大きく異なった。そして氷冷蔵庫から電気冷蔵庫への変化により、食品を「冷やす」だけでなく「保管」することが可能となった（久保編 1991; 村瀬 2005; 小泉2011; 東芝ライフスタイル株式会社 2017）。

掃除道具の歴史が住宅構造の変化と大きな関連があったように、電気冷蔵庫の歴史は人々のライフスタイルの変化と密接な関連がある。それは非常に多様な要因が関連しあうが、本稿では三つの側面を確認する。一つ目は食の洋風化との関連である。電気冷蔵庫の普及により、食の洋風化に不可欠な肉、卵、バターなどを日常的に保管できるようになった。このような基本的条件の整備も食の洋風化に拍車をかけたと考えられる（中川 1995; 久保編 1991）。

二つ目は女性のライフスタイルとの関連である。高度経済成長期にパートタイムに出る主婦が話題にのぼるようになる。パートタイムに出る理由は様々であるが、理由の一つとして、家電製品の普及による家事の合理化を指摘できる。例えば1960年と1970年の国民生活時間調査を比較すると、家事が行われている時刻に変化が見られる。例えば、30代女性のうち平日朝6時に家事をしている人の割合は1960年には52.1%であったが、1970年には28.2%に減少している⁵⁾。この理由について先の1970年の調査では、例えば電気釜の普及など家電製品の普及により早朝の家事が削減された結果ではないかと分析している（日本放送協会放送世論調査所 1971; 日本放送協会放送文化研究所 1990）。また村瀬は、電気冷蔵庫

の普及により毎日買物に行く必要や「……家で『ご用聞き』を待つ必要がなくなると、主婦の時間はずいぶん自由にな……」（村瀬 2005: 219）り、「このことは、女性の社会進出を促進する要因となった」（村瀬 2005: 219）と指摘する。このように家電製品は女性の家事のあり方を変えた点を指摘できる。さらには、家や、やや金額のかさむ耐久消費財などを購入するために主婦をパートタイムに駆り立て、女性のライフスタイルに変化をもたらす側面も指摘されている（労働省婦人少年局 1969）。なお高度経済成長期に主婦がパートタイムを行う様子は、新聞四コマ漫画『サザエさん』にも描かれている。本漫画には時代の特徴がよくあらわれており、世相を読み解く資料と捉えることができる。1966年11月5日の『朝日新聞』東京朝刊15面の漫画では、サザエが近くのお屋敷でパートタイムのお手伝いの募集があることを知り、お屋敷に出向いている。その後例えば1966年11月9日・15日の『朝日新聞』東京朝刊15面の漫画には、同じお屋敷と思われる場所で実際に働く様子が描かれている。このような描写からもパートタイムが行われていた様子を理解できる。

三つ目はマイカーの普及との関連である。東京の道路は1964年の東京オリンピックに向けて環境整備が進められていた。環状六号線・七号線が整備され、1965年には日本初の高速自動車道である名神高速道路が全線開通し、1969年に東名高速道路が全線開通する。加えて、1966年にはトヨタカローラや日産サニーなどの1000ccクラスファミリーカーが登場し、マイカーブームをおこした。ここから1966年は「マイカー元年」と呼ばれた（鈴木 2000; 世相風俗観察会 [1986]2001; トヨタ自動車株式会社 2012）。マイカーの普及は、食材の買い物の仕方にも影響を与えている。それは休日に車でスーパーマーケットにかけ、一週間分の食材をまとめ買いするという買い物スタイルの誕生である（村瀬 2005）。スーパーマーケットは1953年に紀ノ国屋がオープンし、1960年代に急成長した（建野 1991）。このような新しい買い物スタイルの様子は、暮らしの手帖の記事からも読み取ることができる。

ところで、突然話は変わりますが、お宅では日曜日に買物に行きませんか。／とくに郊外では、近所あまり商店がないせいか、運搬係の旦那様を引きつれて、この際とばかり、一週間分の食料品や日用品をどさっと買いこんでいくのが、日曜日の典型的風景といえるくらい、買物は日曜日に集中しています。／だからスーパーなどにとっては、日曜日というのは、かき入れどきなのです。（『暮らしの手帖』1982年81号、P.38、改行は「／」で示した）

新しい買い物スタイルは、電気冷蔵庫の普及により食品を保管できるようになったこと、マイカーの普及、スーパーマーケットの普及、パートタイムに出る主婦の増加など、多くの要素から生まれたものといえるだろう。

このように電気冷蔵庫の普及は、食の洋風化、女性のライフスタイル、マイカーの普及など様々なライフスタイルの変化と深い関連を持ちながら達成し、食品を「冷やす」ことから「保管」することを可能にした。

4.2 余剰品を「発見」する人々

食品の「保管」は、ごみと人間の関係にどのような変化を与えただろうか。そこには、意図せず発生する余剰品を捉えることができる。以下の記述を見て欲しい。

保存／冷蔵庫を戸棚がわりにしない／食品を捨てる理由は、表①でもわかるとおり、「しなびた」「かびが生えた」「腐ってしまった」など。その七割は、冷蔵庫へ入れておいてだめにしたものです。／冷蔵庫が大型化したこともあり、今は、生といわず調理済み食品といわず、たいてい冷蔵庫へ入れてしまいがちです。そこまではよいのですが、そのまま忘れてしまい、その結果、捨てることになります。（『主婦の友』1979年3月号、P.334、改行は「／」で示した）

冷蔵庫を買ってからは、あまり考えないで、ついあれもいりそうだと、これも、と買うくせがついてしまいました。／あまってもしまっておけるから、つい作りすぎるし、しまっておいても、何日ももつとおもうから、そのままにして、くさらせてしまったのです。（『暮らしの手帖』1973年23号、P.8、改行は「／」で示した）

上記の引用からは、以下の流れを読み解くことができる。すなわち、電気冷蔵庫の普及や買い物スタイルの変化が、一度に多くのものを買い込むことや、それを保存することを可能にした。するとついよけいに買いすぎ、よけいに作りすぎ、あまったものはしまい込み、結局だめにしてしまうという流れである。「よけいに」買いすぎ、作りすぎという行動がごみを生み出している。この「よけいに」が生む「余剰品」というごみの台頭をみることができる。なお「食品を電気冷蔵庫にしまい込んでだめにしてしまう」傾向は一部の人間に限ったものではない。環境省のデータによれば、平成29年度に家庭から排出された食品ロス発生量の推計は284万トンにおよび（環境省 2020）、近年重大な問題となっている。

5. 粗大ごみがもたらすごみ概念の変化

5.1 「大きいごみ」から「粗大ごみ」へ

『清掃きよくほう』において1968年の創刊からしばらくの間、繰り返し取り上げられた話題の一つは、大掃除の風景の変化についてである。現在大掃除といえば、暮れに各家庭で念入りの掃除を行う様子をイメージするが、もともと大掃除は年二回程度、地域で一斉に実施されていた。具体的には1954年に制定された「清掃法」第16条によって、建物の占有者は毎年一回以上、市町村長が定める計画に従い大掃除を実施しなければならなくなった。そこで地域ごとに実施日が割り当てられ、おおむね春と秋の年二回大掃除が行われるようになった（真田 1954; 『清掃きよくほう』1971.3.31第31号、2面）。なかでも「……春の大掃除は種々の伝染病や衛生害虫の発生好期を前にし、その予防撲滅のために行う……」（山口 1952: 66）といい、「……秋の大掃除は、夏は部屋を開放し勝ちであるから、室内に塵埃の集積すること

が多くなるのでこれを除去し、冬籠りと新春を迎える下準備のために行う……」（山口 1952: 66）という。従って、大掃除において重要な作業は、畳をあげて、日に当て、叩いてホコリを出すこと、そして床下に薬剤を撒き、害虫の発生を抑えることであった。

ところが団地では、畳をあげて叩く作業を行うことは不可能である。こうして昔ながらの風景が徐々に見られなくなってきた。代わりにいわゆる粗大ごみが出されるようになる。清掃局月報によれば、1967年に行った調査では、大掃除に昔ながらの大掃除（畳をあげたり、物置を整理するなど）をしている人は56%、大型のごみを捨てる人は34.7%であると記されている（『清掃局月報』1968年1月、P.8-9）。また、清掃きよくほうの中には、以下のような文章も見られる。「大掃除も昔と変った。テレビから古障子、スノコ板からタイヤまで、大変バラエティーに富んでいる。そのうち家ごと出されるかもー」（『清掃きよくほう』1969.5.10第13号、1面）。こうした文章からは、大掃除の風景が畳をあげてホコリや害虫を叩き出す「衛生目的」から、「粗大ごみ廃棄目的」へ変化している様子を見て取れる。粗大ごみが大掃除の日にとまとめて出された理由は定かではないが、この日は清掃局も特別な体制を組み、危険物以外のごみは柔軟に対応していたようである。主婦の友には「……年に一、二回の大掃除のときには、指定された場所に、危険物以外はなんでも出してよいことになっています」（『主婦の友』1970年5月号、P.366）という記載すら見られる。逆に通常のごみ収集時は、収集車に粗大ごみを積み込むと集積場に出された全てのごみを収集することが難しくなるため、大きなごみは回収されなかったようである。すると困るのは住宅スペースが狭く、庭を持たない団地居住者であった。1968年に行われた清掃局と民間アパート経営者の懇談会では、民間アパート経営者から以下の質問が出されている。

「アパートに住んでいる者が、電気製品などを買うと、木ワクの始末に困る。普通のごみ集めでは持って行ってくれない。なんとかして欲しい」（『清掃きよくほう』1968.8.12第5号、2面）

このような記事からは、「……住民が普段からいかに大きい不用品の始末に困っているか……」（茂木 1968: 1）を理解することができる。また、一度に大量に廃棄される粗大ごみを収集する清掃局員の労働力は大変大きなもので、ある職員は今年も大掃除の収集で3キロ痩せたと述べている（加賀屋 1969: 1）。年々粗大ごみ量は増加し、計画量を大幅に上回る量が廃棄され、1969年度東京都板橋区においては計画量を約6割強も上回ったという（佐藤 1969: 4）。このような量の増加と都民からの要望の高まりを受け、東京都では1969年10月から段階的に粗大ごみ収集を開始した。そして、1971年度中に東京都23特別区全域で粗大ごみ収集を開始し、毎月収集されることとなった（『清掃きよくほう』1971.3.31第31号、2面）。

5.2 粗大ごみの異質性

ここで着目したいのは、大掃除の風景が変化してきたということではなく、この時期に問題として表出した粗大ごみが、人々にどのように捉えられていたかである。それは大きく三つの「異質性」に集約できる。一つ目は、大きさである。1969年に「粗大ごみ」という用語が確立・定着する以前、清掃きよくほうでは、「大

きいごみ」「大型のごみ」「雑物」などの表現が用いられてきた。1969年の清掃局月報では「粗大ごみとは、通常のごみ容器に入らない大型ごみで、家庭用電化製品、庭木、自転車等」（『清掃局月報』1969年10月、P. 7）と定義されている。このようにごみ容器に入らないほどの大きさは、一つの特徴として理解されている。

二つ目は、家電製品や車など、これまでは捨てることが想定されていなかった対象が登場してきたことである。例えば主婦の友には、以下のような記事がみられる。

ごみの量は、一昔前とくらべて、はるかにふえています。台所から出るごみ、紙くず、ぼろきれなどのほかに、テレビ、電気冷蔵庫、洗濯機などの家庭電化製品、大型の家具、はては自動車までが、ごみとしてどんどん捨てられていくこのごろです。（『主婦の友』1970年5月号、P.365）

上記の引用からは、粗大ごみが通常のごみと区別されて認識される様子を見ることができるといえる。柴田徳衛（1971: 3）は当時のごみを三つに分類している。すなわち普通のごみ、すぐに捨てられないごみ、産業廃棄物の三つである。すぐに捨てられないごみとは、耐久消費財や粗大ごみであるといい、具体的にはテレビ、洗濯機、冷蔵庫をあげている。

三つ目は、腐らないことである。清掃きよくほうに寄せられた市民からの手紙の中には「ゴミといっても大掃除のゴミと違い、台所から出るゴミは腐敗しやすく、その臭いは格別……」（森川 1969: 3）という記述があり、それは台所から出るごみと区別され、腐らないことを一つの特徴として理解している。

粗大ごみ登場時に表出した「異質性」の感覚からは逆説的に、粗大ごみ登場以前のごみが「燃やすことができ、埋め立てることができ、土壌化できる、小さな存在」であることを読み取ることができる。同時に粗大ごみの登場により、これまでのごみ概念の変更を余儀なくされる様子を読み取ることができる。

6. ごみ概念の拡大化

ここまで、高度経済成長期に掃除機と電気冷蔵庫が普及することによって、ごみと人間の関係がどのように変化したのかを検討してきた。その結果、人々は空間を舞うチリやホコリ、余剰品、粗大ごみというごみを「発見」する様子を確認した。これまで見えていなかったところにごみを見出し、ごみが生まれていなかったところにごみを生み出し、新たな特徴を持つごみと出会う中で、人々のごみ概念は拡大しているといえるだろう。掃除機と電気冷蔵庫の登場は、ごみと人間の関係において新たにごみを「発見」し、ごみ概念自体を拡大させるという変化をもたらした。本稿冒頭で確認したとおり、これまで高度経済成長期はごみの量や質が大量化・多様化した時代であることが指摘されてきた（飯島 2000; 田口 2007）。これらの議論の焦点は、各家庭から収集されたごみ全体へ向けられている。こうした視点に加えて、人々のごみ概念自体が拡大していることへも注目すべきではないだろうか。

興味深いのは掃除機も電気冷蔵庫も、そもそもごみ概念を拡大させるようなモノには見えないことである。掃除機はごみを吸い取る道具であり、電気冷蔵庫は食品を冷蔵・保管するための道具である。それに

もかわらず、なぜ掃除機と電気冷蔵庫の普及や廃棄を通してごみ概念は拡大されたのだろうか。それは私たちが日常生活の中で何をごみと捉えるかは、私たちが持つモノの影響を受けているからではないだろうか。身近にどのようなモノがあり、それはどのような機能を有し、何を望むのかに応じて、私たちはごみを生み出しているように見える。ゆえに掃除機や電気冷蔵庫という新しいモノの登場によって、新しいごみ概念が創出されたと考えられる。

新しいモノが新しいごみ概念を創出する側面は、近年の電子機器類の発展・普及においても確認できる。電子機器類は急速に発展・普及し、私たちの生活を変えた。不要になった電子機器類は「電気電子機器廃棄物(e-waste)」と呼ばれるごみとなる。電気電子機器廃棄物の新しさとは、そこに非常に多くの資源が眠っていることである。これらの資源をいかに回収するかは大きな論点となっている。さらに注目すべきは、電子機器類の登場によって「デジタルごみ(digital waste)」という新しいごみ概念が創出していることである。シュテファン・シュミット(2010)は、インターネット上などに残る、使わなくなったデータなどをデジタルごみと理解していると解釈できる。このような定義に立った場合、筆者はデジタルごみの新しさとは「完全な消去が難しく、かつ増殖する点」にあると考える。なぜなら特にインターネット上に一度アップされたデータは、所有者が元データを削除しても、第三者がそのデータをコピーしていた場合、全てのデータを消去することは難しい。このようなデータの特性が悪い方向に機能して、個人情報や誹謗中傷などがインターネット上に拡散し続ける様子は、メディアを中心に「デジタル・タトゥー」という言葉を用いて議論されている。私たちの生活は電子機器類の登場によって大きく変化した。そして電気電子機器廃棄物やデジタルごみという新しいごみを「発見」し、ごみ概念を拡大している最中といえるだろう。このように、ごみの「発見」と「拡大」は現在進行形の事象であることから、さきがけと考えられる高度経済成長期の事例を検討することは意味があるだろう。

私たちは新しいモノを作り上げると同時に、新しいごみ概念をも作り上げている。各家庭から収集されたごみ全体の傾向に注目するだけでなく、個々のごみ概念の拡大にも注目しながら、ごみとの付き合い方を検討していく必要があるのではないだろうか。

付記

本稿は博士論文『ごみの社会学——「モノの価値」と「ごみの家庭生活」の視点から』（大阪大学大学院人間科学研究科、2020年3月）の第8章を中心に加筆修正を加えたものである。また本研究はJSPS 科研費20J00377の助成を受けたものです。

文献

- [1] Cowan, Ruth Schwartz, 1983, *More Work for Mother: The Ironies of Household Technology from the Open Hearth to the Microwave*, New York: Basic Books. (高橋雄造訳, 2010, 『お母さんは忙しくなるばかり——家事労働とテクノロジーの社会史』法政大学出版局.)

- [2] 独立行政法人都市再生機構技術・コスト管理室設備計画チーム, 1993, 「換気設備の移りかわり」『ING REPORT 機』28-9, (2020 年 11 月 15 日 取得, https://www.ur-net.go.jp/rd_portal/architec/pnf/ing_report_k/lrmhph000000j12p-att/ing_k.pdf).
- [3] 布野修司, 2006, 「nLDK の誕生——近代日本の都市住宅事情」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学③——都市の生活リズム』吉川弘文館, 65-90.
- [4] 飯島伸子, 2000, 『環境問題の社会史』有斐閣.
- [5] 犬養智子, 1970, 「歳末の家事特集 I ポイント掃除で、住まいのイメージアップを」『主婦の友 12 月号』149-56.
- [6] 伊東, 1960, 「大掃除はしない」『主婦の友 12 月号』289.
- [7] 加賀屋慶次郎, 1969, 「笑っていこう (2)」『清掃きよくほう』1969.6.28 第 14 号, 1 面.
- [8] 環境省, 2020, 『令和元年度食品廃棄物等の発生抑制及び再生利用の促進の取組に係る実態調査報告書』, 環境省食品ロスポータルサイト, (2020 年 11 月 16 日取得, <https://www.env.go.jp/recycle/H31houkokusyo.pdf>).
- [9] 小泉和子, 2011, 『新装版 昭和のくらし博物館』河出書房新社.
- [10] ———, 2015, 『新装版 昭和の家事——母たちのくらし』河出書房新社.
- [11] ———, 2016, 『昭和なくらし方——電気に頼らない、買わない・捨てない、始末のよいくらし』河出書房新社.
- [12] ———, 2018, 「日本人はいつから『拭く』ようになったのか?」『ミツカン水の文化センター機関誌 水の文化』58: 10-3.
- [13] 久保道正編, 1991, 『家電製品にみる暮らしの戦後史』ミリオン書房.
- [14] 茂木謙策, 1968, 「不燃物と粗大ごみ」『清掃きよくほう』1968.11.15 第 8 号, 1 面.
- [15] 森川みどり, 1969, 「ある手紙——テレビ“ゴミと戦う”を見て」『清掃きよくほう』1969.12.24 第 18 号, 3 面.
- [16] 村瀬敬子, 2000, 「掃除と洗濯」柏木博・小林忠雄・鈴木一義編『日本人の暮らし——20 世紀生活博物館』講談社, 99-109.
- [17] ———, 2005, 『冷たいおいしさの誕生——日本冷蔵庫 100 年』論創社.
- [18] 内閣府, 2004, 「主要耐久消費財等の普及率 (平成 16(2004) 年 3 月で調査終了した品目)」, 内閣府ホームページ, (2019 年 12 月 7 日取得, <https://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/0403fukyuritsu.xls>).
- [19] 中川博, 1995, 『食の戦後史』明石書店.
- [20] 日本放送協会放送世論調査所, 1971, 『昭和 45 年度国民生活時間調査』日本放送出版協会.
- [21] 日本放送協会放送文化研究所, 1990, 『国民生活時間調査 (昭和 35 年調査) 第一巻資料編 I (属性別)』大空社.
- [22] 沼畑金四郎, 1954, 「春の大掃除について——まず、細菌類追出しに工夫を」『朝日新聞』1954.4.23 東京朝刊, 3 面.
- [23] 大田・田伏・伊東, 1960, 「能率的な大掃除」『主婦の友 5 月号』284-5.
- [24] 労働省婦人少年局, 1969, 『パートタイム雇用の現状と課題』日本労働協会.
- [25] 酒井玲子, 1958, 『パンフレット知識だけでは不安』『主婦の友 12 月号』220.
- [26] 真田秀夫, 1954, 「大掃除も法律上の義務に——特別清掃地域の指定、汚物投棄の禁止等」『時の法令』142: 22-6.
- [27] 佐藤一春, 1969, 「大掃除にひとこと」『清掃きよくほう』1969.9.13 第 15 号, 4 面.
- [28] Schmidt, Stephan, 2010, “A Growing Digital Waste Cloud,” *Our World: Brought to You by United Nations University*, Tokyo: United Nations University, (Retrieved September 17, 2020, <https://ourworld.unu.edu/en/a-growing-digital-waste-cloud>).
- [29] 世相風俗観察会, [1986]2001, 『現代風俗史年表——昭和 20 年 (1945) ~平成 12 年 (2000)』河出書房新社.
- [30] 柴田徳衛, 1971, 「都市問題と清掃事業」『清掃きよくほう』1971.9.23 第 34 号, 3 面.
- [31] 矢道恒信, 2000a, 「家を建てる」柏木博・小林忠雄・鈴木一義編『日本人の暮らし——20 世紀生活博物館』講談社, 73-81.

- [32] ———, 2000b, 「住み心地」 柏木博・小林忠雄・鈴木一義編『日本人の暮らし——20世紀生活博物館』講談社, 82-90.
- [33] 鈴木一義, 2000, 「自動車とマイカー」 柏木博・小林忠雄・鈴木一義編『日本人の暮らし——20世紀生活博物館』講談社, 118-27.
- [34] 田口正己, 2007, 『ごみ社会学研究——私たちはごみ問題とどう向き合ってきたか?』自治体研究社.
- [35] 田中ちた子, 1954, 「六月の家事手帖——梅雨を気持ちよく暮すために」『主婦の友6月号』434-5.
- [36] 建野堅誠, 1991, 「スーパーの概念と発展過程」『長崎県立大学論集』25(1): 25-54.
- [37] 東芝未来科学館, 2020, 「日本初の電気掃除機」, 東芝未来科学館ホームページ, (2020年11月12日取得, https://toshiba-mirai-kagakukan.jp/learn/history/ichigoki/1931cleaner/index_j.htm).
- [38] 東芝ライフスタイル株式会社, 2017, 「東芝電気冷蔵庫75年の歩み」, 東芝ライフスタイル株式会社ホームページ, (2020年11月12日取得, <https://www.toshiba-lifestyle.co.jp/living/exhibition/history/refrigerator.htm>).
- [39] トヨタ自動車株式会社, 2012, 「第2部 第1章 第2節 第1項 高度成長とモータリゼーション」, トヨタ自動車75年史ホームページ, (2019年12月7日取得, https://www.toyota.co.jp/jpn/company/history/75years/text/entering_the_automotive_business/chapter1/section2/item1.html).
- [40] 上田フサ・金原松次・田中ちた子, 1957, 「梅雨時の生活手帖 食」『主婦の友6月号』182-3.
- [41] 山口与四郎, 1952, 「大掃除と虫退治」『科学朝日』12(5): 66-7.

注

- 1) 『主婦の友』のタイトル表記は、1953年までは『主婦之友』、1954年以降は『主婦の友』へ変更したが、本研究では全て『主婦の友』に統一して記した。同様に『清掃きよくほう』は、1969年3月29日第12号までは『せいそう局報』、1969年5月10日第13号以降は『清掃きよくほう』へ変更したが、本研究では全て『清掃きよくほう』に統一して記した。
- 2) 記事の数え方については、例えば、ひとつの記事の中に2つのテーマに関する記載があり、かつテーマ別に記事を検討する必要がある場合、記事数は2と数えた。
- 3) 新聞・雑誌記事内に個人名が記載されている場合、署名入り記事と判断した。インタビュー記事の中には、記載された個人名が単なる取材協力者なのか筆者なのか不明瞭な場合もあったが、署名入り記事とみなした。ただし「記者」と記され個人名が不明な場合は、署名入り記事とはみなさなかった。
- 4) 油ぞうきんとは、貸し雑巾、市販品の不織布、ボロに着塵液を染み込ませて手作りするものなど様々な種類が見られるが、いずれもごみを吸着してとらえる掃除道具である。
- 5) 国民生活時間調査は1970年より調査方法や分類項目などが変更しており、経時比較には留意が必要である。本稿ではおおよその傾向を把握する数値として用いた。なお1960年の数字は、火曜日の自宅内外の家事時間を合計した値である。

Effects of the Spread of Vacuum Cleaners and Electric Refrigerators on the Relationship between Waste and People: Focusing on the Period of High Economic Growth in Japan

Yuki UMEKAWA

Abstract:

This study aims to reveal how the relationship between waste and people changed due to the increased use of vacuum cleaners and electric refrigerators in the period of high economic growth in Japan. The analysis is mainly based on *Shufu no Tomo*, a women's magazine, and *Seiso Kyokuho*, a bulletin of Bureau of Public Cleansing Tokyo Metropolitan Government. Three findings emerge. First, changes in housing structures during high economic growth forced a change from cleaning by sweeping with a broom to sucking with a vacuum cleaner, which reduced the amount of air-borne dust in houses but made people strongly aware of such dust. Second, as the electric refrigerator made it possible not only to cool items but also to store them, people amassed surplus goods. They bought, made, and stored too much of an item, resulting in eventual spoilage. Third, when vacuum cleaners and electric refrigerators were discarded as bulky refuse, the heterogeneity of bulky refuse became more prominent, whereas previously waste had been understood as small things that could be burned, landfilled, and allowed to decay.

Thus, people gained awareness of waste such as air-borne dust in houses, surplus goods, and bulky refuse, expanding the concept of waste itself.

Key Words : Waste, high economic growth period, vacuum cleaner, electric refrigerator, relationship between waste and people